

国立国会図書館蔵「無慮山莊旧蔵拓本」^[1]

福島 恵

はじめに

国立国会図書館には「無慮山莊旧蔵拓本」（請求記号：222.002-M988）と呼ばれる全42張の拓本が3帙^[2]に分けられて所蔵されており、東京本館の古典籍資料室で申請すれば即日実物を見ることができる。このコレクションには、後述するように、漢字の他に中国の北方・西方の歴代の各民族の文字の拓本が数多く含まれており、その内容も各民族の歴史を示す史料として第一級の重要な石刻資料ばかりである。しかしながら、これまでこの「無慮山莊旧蔵拓本」が国立国会図書館に所蔵されていることは専門家の間でも知られておらず、残念なことに研究に用いられて来なかった。そこで、本稿はまず「無慮山莊旧蔵拓本」の内容を簡単に紹介することで、各拓本の価値を確認したい。

次に、この「無慮山莊旧蔵拓本」が国立国会図書館に入るまでの来歴に迫りたい。詳細は後述するが、これら「無慮山莊旧蔵拓本」には、そのすべてに「東亜研究所蔵書之印」があり、そこに所蔵先の変更を示す「消」の印が押されている。東亜研究所は、日中戦争開戦を契機に設置された日本の調査機関であるので、この印からこのコレクションが戦時中に東亜研究所で所蔵されていたが、その後国立国会図書館へ所蔵先を変えたことが分かる。また、このコレクションの名称に「無慮山莊旧蔵」とあること、そして全ての拓本には「無慮山莊」もしくは「無慮山農」という墨書あるいは印が見えるので、このコレクションは、もとは無慮山農という号の人物が、無慮山莊で収集したものだとは分かるが、これまでの研究では無慮山農がどのような人物であったかは明らかにされていない。そこで、本稿ではこの貴重な拓本を収集した無慮山農とは誰なのかを明らかにするとともに、本コレクションが無慮山莊、東亜研究所、国立国会図書館と次々に所蔵先を変えたその経緯と背景を探ることで、「無慮山莊旧蔵拓本」のコレクションとしての価値を確認したい。

1. 「無慮山莊旧蔵拓本」の内容

「無慮山莊旧蔵拓本」に収蔵される拓本の内容は表1の通りである。全3帙に分けられているが、帙に貼られた題箋には「無慮山莊旧蔵」とあること、そして本コレクションの受入時に作成された東亜研究所の『新着図書目録』No. 15 [p. 126] 及び国立国会図書館の「図書原簿和漢書 96001-99000」に掲載される拓本の順序と現状とは異なっていることから、国

表1 国立国会図書館「無慮山荘旧蔵拓本」の内容

	箱書き	国立国会図書館 コレクション名称		国立国会図 書館アクセ スナンバー	東亜 研究所 消費番号	黄題箋	
						墨書	朱印
第1 帙	題箋：無慮山荘旧蔵拓 本（一）居庸関六体書 仏經九枚 箱題箋下の題箋に墨書 「□感応寺 唐吐蕃会 盟 女真国書 □碑 四本」	居庸関六体書仏經 9張	第1冊1	97475	65731	居庸関六体書仏經 東壁下段 堅 列 左一 蒙古新字即帕克斯巴所 製 無慮山荘蔵	無慮山農
			第1冊2	97474	65730	居庸関六体書仏經 東壁下段 堅 列 左二 畏兀兒字 無慮山荘蔵	無慮山農
			第1冊3	97473	65720 (65729の 誤か?)	居庸関六体書仏經 東壁下段 堅 列 左三 西夏字 無慮山荘蔵	無慮山農
			第1冊4	97471	65727	居庸関六体書仏經 東壁下段 堅 列 左四 漢字 無慮山荘蔵	
			第1冊5	97467	65723	居庸関六体書仏經 西壁上段 横 列 第一列 梵字 第二列 土伯 特字 無慮山荘蔵	無慮山農
			第1冊6	97468	65724	居庸関六体書仏經 西壁下段 堅 列 左一 蒙古新字即帕克斯巴所 製 無慮山荘蔵	無慮山農
			第1冊7	97469	65725	居庸関六体書仏經 西壁下段 堅 列 左二 畏兀兒字 無慮山荘蔵	無慮山農
			第1冊8	97470	65726	居庸関六体書仏經 西壁下段 堅 列 左三 西夏字 無慮山荘蔵	無慮山農
			第1冊9	97472	65728	居庸関六体書仏經 西壁下段 堅 列 左四 漢字 無慮山荘蔵	無慮山農
第2 帙	題箋：無慮山荘旧蔵拓 本（二）拉薩唐蕃会盟 碑 涼州護国寺感応寺 塔碑 涼州大清屯田処 題字 共四枚 箱題箋下の題箋に墨書 「居庸関六体書仏經九 本」	拉薩唐蕃会盟碑	第2冊	97476	65733	唐吐蕃会盟碑 碑陽 西藏喇薩 唐長慶元年蕃贊普彝泰七年漢蕃兩 体書 無慮山荘蔵	
			第3冊1	97479	65735		無慮山農
		涼州護国寺感応寺 塔碑 2張	第3冊2	97478	65734		無慮山農
			第4冊	97481	65737	清屯田処題字 清長白富徳 無慮 山荘蔵	①甘年典属 三部蔵山 ②無慮山荘 所蔵書画 金石文字
第3 帙	題箋：無慮山荘旧蔵拓 本（三）楊樹山女真国 書摩崖 開封宴台金源 国書碑 和林三靈侯廟 碑 嶺北省右丞郎中総 管収糧記 兵馬劉公去 思碑 苾伽可汗碑 九 姓遇鵠可汗碑 九姓遇 鵠可汗碑殘石 日月碑 題名殘碑 断碑 殘碑 蒙古人造像 関帝廟碑 共二十九枚 箱題箋下題箋に墨書 「和林碑文他 回紇 日月 三靈侯 苾伽可 汗 蒙古人造像 劉公 去思 等九本」	遼寧省海龍県楊樹 山女真国書摩崖	第5冊	97477	65732	女真国書摩崖 奉天海龍県楊樹林 山 金収国二年五月 無慮山荘蔵	
			第6冊	97505	65753	(鉛筆)女真国書 河南出土	
		開封宴台金源国書 碑	第7冊1	97507	65763		無慮山農
		和林三靈侯廟碑	第7冊2	97499	65759		無慮山農
		和林嶺北省右丞郎 中総管収糧記	第8冊	97506	65762		無慮山農

国立国会図書館蔵「無慮山莊旧蔵拓本」(福島)

(字体は常用漢字に直した。判読不明の字は□とした。)

白題箋 墨書	白小付箋	その他 (拓本に見る メモ書き・朱印)	備考 (通称・主要参考文献・該当箇所など)		文字
(白題箋なし)	(白小付箋なし)		「居庸関六体文字」 (東壁は「六体尊勝 陀羅尼石刻」、西壁 は「六体如来心経石 刻」とも言う) 村田・藤枝 1955・ 1958 東壁上段のチベット 文字の部分を除いた 全てを文字ごとに分 割。	東壁下段	バスバ文字
(白題箋なし)	(白小付箋なし)			東壁下段	ウイグル文字
(白題箋なし)	(白小付箋なし)			東壁下段	西夏文字
(白題箋なし)	(白小付箋なし)			東壁下段	漢字
(白題箋なし)	(白小付箋なし)			西壁上段	ランチャ文字 チベット文字
(白題箋なし)	(白小付箋なし)			西壁下段	バスバ文字
(白題箋なし)	(白小付箋なし)			西壁下段	ウイグル
(白題箋なし)	(白小付箋なし)			西壁下段	西夏字
(白題箋なし)	(白小付箋なし)			西壁下段	漢字
(白題箋なし)	(白小付箋なし)		「唐蕃会盟碑」 Iwao et al., 2009	西面	チベット文字・ 漢字
(白題箋なし)	(白小付箋なし)	題箋を添付した面に (鉛筆) 重修感応寺西 夏碑 漢文	「感応塔碑」・「感通 塔碑」・「西夏碑」 西田 1964, 長田 2006	漢字面	漢字
(白題箋なし)	(白小付箋なし)	題箋を添付した面に (鉛筆) 重修感応寺西 夏碑 西夏文		西夏文字面	西夏文字
(白題箋なし)	(白小付箋なし)		詳細不明		漢字
(白題箋なし)	(白小付箋なし)		「海龍女真国書摩崖」・「楊樹林山摩崖」・「授官摩 崖」 金光平・金啓琮 1980-b, Daniel Kane 1989-b, 愛 知県大 HP-a		女真文字
宴台金源国書碑 (女真字)	(墨書) 宴台国 (鉛筆「書」) 碑	拓本余白に朱印「廿年 典属三部藏山」・「無慮 山農」・「於微慮」	「女真進士題名碑」・「宴台女真国書碑」 金光平・金啓琮 1980-a, Daniel Kane 1989-a, 吉 池 2007, 愛知県大 HP-b・c・d 碑額部分なし。		女真文字
和林 三靈侯廟碑 (至元十 六年)	(墨書) 三靈廟碑		「瓶建三靈侯廟記」 中村 2007	碑陽 Radloff 1892: Taf.XLVII-2 (下部 4-5 行分あり)	漢字
和林 三靈侯廟碑碑陰		題箋を添付した面に (鉛筆) 三靈侯廟碑 碑陰		碑陰 Radloff 1892: Taf.XLVII-3	漢字
和林 嶺北省右丞郎中総管 収糧記	(墨書) 総管収糧記		「嶺北省右丞郎中総 管収糧記」 松川 1997, 松川・ 松井 1999		碑陽 Radloff 1892: Taf.XLV-1

表 1

箱書き	国立国会図書館 コレクション名称		国立国会図 書館アクセ スナンバー	東亜 研究所 消番号	黄題箋	
					墨書	朱印
	和林兵馬劉公去思 碑	第9冊1	97485	65741		無慮山農
	和林兵馬劉公去思 碑陰	第9冊2	97487	65743		無慮山農
	和林苾伽可汗碑 中国文	第10冊1	97503	65757		無慮山農
	和林苾伽可汗碑 突厥字	第10冊2	97504	65758		無慮山農
	和林九姓回鶻可汗 碑	第11冊	97502	65756		無慮山農
	和林九姓回鶻可汗 碑残石	第12冊	97500	65760		無慮山農
	和林日月碑 2張	第13冊1	97488	65744		無慮山農
		第13冊2	97489	65745		無慮山農
	和林題名残碑 2張	第14冊1	97508	65764		無慮山農
		第14冊2	97501	65761		無慮山農
	和林断碑 4張	第15冊1	97491	65747		
		第15冊2	97496	65752		無慮山農
		第15冊3	97497	65754		無慮山農
		第15冊4	97498	65755		無慮山農
	和林断碑 突厥字 4張	第16冊1	97492	65748		無慮山農
		第16冊2	97493	65749		無慮山農
		第16冊3	97494	65750		無慮山農
		第16冊4	97495	65751		無慮山農
	和林残碑 蒙・漢・維吾爾字	第17冊	97490	65746		無慮山農
	和林蒙古人造 4張	第18冊1	97482	65738		無慮山農
		第18冊2	97483	65739		
		第18冊3	97484	65740		無慮山農
		第18冊4	97486	65742		無慮山農
	和林閼帝廟碑 雍正6年	第19冊	97480	65736		無慮山農

※以下はマイクロフィルムでも保存されている。「居庸関六体書仏経」(第1冊1～4, 6～9): 請求番号 YD-A-6857, 「和林断碑」

国立国会図書館蔵「無慮山莊旧蔵拓本」(福島)

(つづき)

白題箋 墨書	白小付箋	その他 (拓本に見る メモ書き・朱印)	備考 (通称・主要参考文献・該当箇所など)		文字
和林 兵馬劉公去思碑		題箋を添付した面に (鉛筆) 和林劉公去思 碑	「兵馬劉公去思碑」 村岡 2013・2015	碑陽 Radloff 1892 : Taf.XLVI-1	漢字
和林 兵馬劉公去思碑碑陰	(墨書) 劉公去思碑			碑陰 Radloff 1892 : Taf.XLVI-2	漢字
和林 苾伽可汗碑	(墨書) 怛伽可汗碑中文		「ビルゲ可汗碑」 小野川 1943	漢字面 Radloff 1892 : Taf. XXI (下部大断片の正面のみ)	漢字
和林 苾伽可汗碑 (突厥 字)	(墨書) 怛伽可汗碑陰一張	題箋を添付した面に (赤鉛筆) 突厥字		突厥文字面 Radloff 1892 : Taf. XXII (下部大断片の正面のみ)	突厥文字
和林 九姓迴鶻可汗碑	(墨書) 回鶻怛伽可汗		「カラ＝バルガス ン碑 (断片)」 森安・吉田・片山 1999	Radloff 1892 : Taf. XXXI (左側面 1 行分まで), XXXII-1	ソグド文字・漢 字
和林 九姓迴鶻可汗碑残石		題箋を添付した面中央 に (鉛筆) 九姓迴鶻可 汗碑残石		Radloff 1892 : Taf. XXXIV-1	漢字
和林 日月碑 (日碑)	(墨書) 日月碑			Radloff 1892 : Taf.L-1(上部) + LI-2 (下部)	モンゴル文字・ 漢字
和林 日月碑 (月碑)		題箋を添付した面に (鉛筆) 月碑		Radloff 1892 : Taf.LI-1	モンゴル文字・ 漢字
和林 題名残碑 (一)	(墨書) 三皇廟碑		「和寧忠愍公碑」 松井 2007	碑陰 Radloff 1892 : Taf.XLIII-4	漢字
和林 題名残碑 (二)				碑陰 Radloff 1892 : Taf.XLIII-3	漢字
和林 断碑 (一)			「カラ＝バルガス ン碑 (断片)」 森安・吉田・片山 1999	Radloff 1892 : Taf. XXXIII-3	ソグド文字
和林 断碑 (二)				Radloff 1892 : Taf. XXXIII-2	ソグド文字
和林 断碑 (三)				Radloff 1892 : Taf. XXXII-4	ソグド文字
和林 断碑 (四)				Radloff 1892 : Taf. XXXII-2	ソグド文字
和林 断碑 (突厥字) (一)				Radloff 1892 : Taf. XXXV-1,6 詳細は図 1 参照。	突厥文字
和林 断碑 (突厥字) (二)					突厥文字
和林 断碑 (突厥字) (三)					突厥文字
和林 断碑 (突厥字) (四)					突厥文字
和林 残碑 (蒙・漢・維吾 尔字)		題箋を添付した面に (鉛筆) 回紇文碑 拓上に朱印「三多所 拓」あり	「嶺北省右丞郎中總 管取糧記」 松川 1997, 松川・ 松井 1999	碑陰 Radloff 1892 : Taf.XIV-2 (下部あり)	モンゴル文字・ 漢字・チベット 文字
和林 蒙古人造像 (一)	(墨書) 蒙古石人造像	題箋を添付の裏面に (青鉛筆) 石人	ザブハン県のムングト・ヒサー遺跡の石碑。 江上 1951 : 図 26, 大澤・鈴木・ムンフトルガ 2009 : pp. 41-42		(人物像：下部 は文字?)
和林 蒙古人造像 (二)	(青鉛筆) 蒙古石人				(人物像)
和林 蒙古人造像 (三)		題箋を添付した裏面に (青鉛筆) 石人			(図像・文字, 判別不能)
和林 蒙古人造像 (四)	(墨書) 蒙古石人像四張				(図像・文字, 判別不能)
和林 関帝廟碑 (雍正六 年)	(墨書) 関帝廟碑壹張		詳細不明		漢字

(第 16 冊) : 請求番号 YD-A-6927

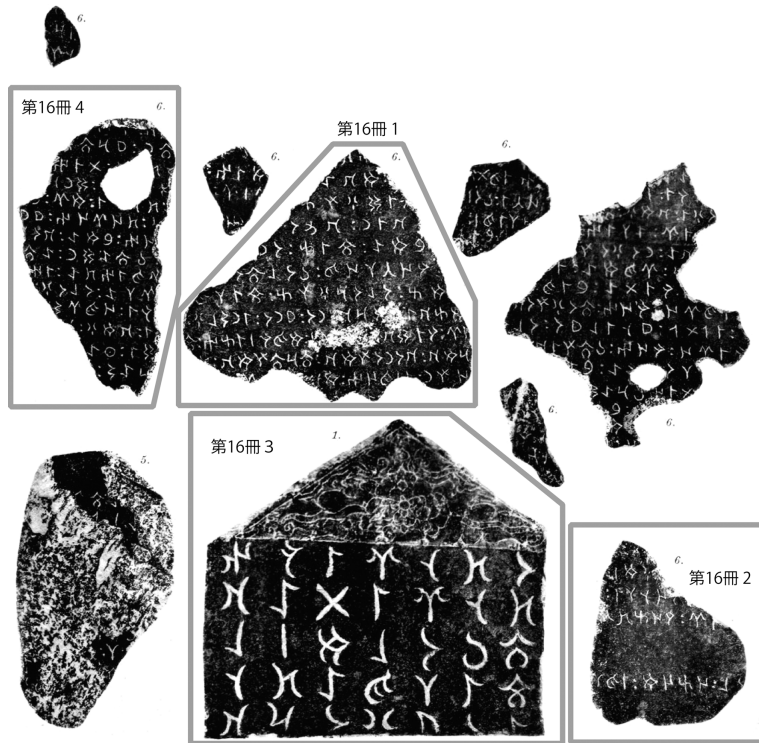


図1 「和林断碑突厥字」(第16冊)の内容
(Radloff [1892 : Taf. XXXV] をもとに作成)

立国会図書館で現在の形に整理されたと考えられる。また、各張に付けられた「第〇冊〇」という通し番号も国立国会図書館で割り振られたとみられる。

各帙の内容を大まかに見れば、第1帙には、第1冊として居庸関の「六体字」のうち、東壁(陀羅尼經)上段(ランチャ文字・チベット文字の部分)を除いた全ての部分が、文字ごとに分けられて収納されている。第2帙には、拉薩の「唐蕃会盟碑(西面)」(第2冊)と涼州の「西夏碑」(第3冊)が収められている。また、「涼州大清屯田処題字」(第4冊)も入るが、この碑についての報告を見つけ出すことはできず、比定できなかった。第3帙には、まず第5・6冊の女真文字の碑文が入る。残る第7-19冊は題名の前に「和林」と付されていて、「和林」(= 哈喇和林・カラコルム・ハルホリン)で採られた拓本が入る^[3]。この「和林」を冠する拓本は、本コレクションの中でも特に貴重であるとみられる。その第一の理由は、これらの拓本が世界的に見ても所蔵する機関が限られていることである。これまで所蔵機関が調査・報告されているものとしては、以下がある。

第8・17冊「嶺北省右丞郎中総管収糧記」:[松川・松井 1999 : p. 175]

立命館大学図書館, モンゴル国科学アカデミー, 大阪大学文学部

第11・12・15・16冊「カラ＝バルガスン碑」：[森安・吉田・片山1999：p.210]

アジア博物館（サンクト＝ペテルブルク）、アジア協会（パリ）、北京図書館善本部・中央民族大学図書館（北京）、京都大学総合博物館＋立命館大学文学部、モンゴル国科学アカデミー、大阪大学文学部〔ごく一部のみの所蔵の機関を含む〕

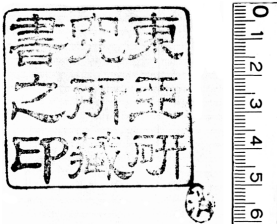
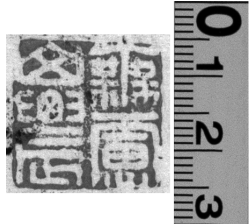
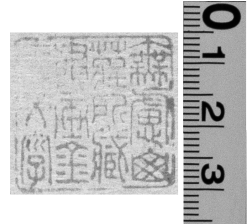
以上の他に、第7・9・13・14冊は、上記の第8・17冊と同様にハルホリンのエルデニ＝ゾー寺院内にあるものなので、その所蔵機関は共通している可能性があるだろう。つまり、「無慮山莊旧蔵拓本」は世界有数の拓本で構成されており、国立国会図書館はそれを所蔵していることになる。第二の理由は、これらの拓本の採拓時期が早いことである。一般に拓本は採拓された時期が早ければ早いものほど貴重である。そもそも、モンゴル地域の碑刻は、Radloff [1892]・李文田 [1897] による報告で広く世に知られ、注目を集めるようになったものであるが、本コレクションの「和林」を冠する拓本の多くは、これらの報告と重なるものである。後述するように本コレクションの「和林」がつく拓本は、1910年もしくはその翌年末までに採拓されたと考えられるので、これらの報告の僅か十数年後という早期に採られた拓本であると言えよう。そして、この20世紀初頭の拓本がこのようにまとまったコレクションとして保存されているのは、世界的に見ても稀少であると言えるだろう。なお、今回の調査では、第3帙中の第19冊「和林関帝廟碑」をいずれの碑石か比定することはできなかった。

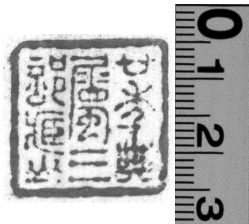
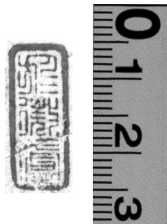
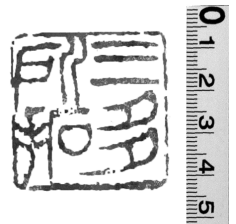
以上、収蔵された拓本の内容から、この「無慮山莊旧蔵拓本」が、漢字だけではなく、非漢族による文字の碑刻を数多く含む、世界有数の拓本コレクションであることが分かった。

2. 「無慮山莊旧蔵拓本」に見る朱印

「無慮山莊旧蔵拓本」に押された朱印は、「国立国会図書館蔵書」の印以外では全部で6種類ある（表2）。No.1「東亜研究所蔵書之印」は、折りたたまれた拓本の上面（題箋が添付される面）を一度開いた面（拓本の裏面）に押され、すべてに「消」印が重ねて押されている。No.2「無慮山農」はコレクターの号であり、No.3「無慮山莊所蔵書画金〔石〕文字」は無慮山莊では書画や金文・石文を収集していたことを示している。No.5「於微慮」は、「無慮」の別表記であると考えられる。無慮山は、現在の遼寧省錦州市に位置する中国東北部の三大名山の一つである医巫閭山を指す。医巫閭は、無慮・医無閭・於微閭などとも記され^[4]、当地には漢代に「無慮県」が置かれている〔『漢書』地理志、遼東郡、p.1626〕。医巫閭山の漢字表記には、近い音でいくつものバリエーションがあったことになる。No.5「於微慮」が「無慮」の別表記だということは、無慮山農は「無慮」という言葉を選んで号としたのではなく、現在は医巫閭山と記されるその山名を号としたことを示していると言え、こ

表2 「無慮山莊旧蔵拓本」に見られる朱印

画像	No. 1 	No. 2 	No. 3 
印文	「東亜研究所蔵書之印」+ 「消」	「無慮山農」	「無慮山莊所蔵書画金〔石〕 文字」
押印され た拓本	全て	第2・5・15-1・18-2 以外 の全て	第4冊

画像	No. 4 	No. 5 	No. 6 
印文	「廿年典属三部蔵山」	「於微慮」	「三多所拓」
押印され た拓本	第4・6冊	第6冊	第17冊

画像の典拠：No.1はマイクロフィルムのプリントアウトを利用。No.2～6は、国立国会図書館提供。
 なお No.6は筆者が朱印部分を抽出処理した。

のことは無慮山農が誰なのかを知る上でも手がかりとなる。

No. 4「廿年典属三部蔵山」の印文は、二つの故事から成るとみられる。前半の「廿年典属」は、前漢の名臣 蘇武の故事である。武帝の天漢元年（前100）、蘇武は漢が拘留していた使者を送り返すために匈奴に赴くが、そこで幽閉されてしまう。昭帝の時（前87～前74年）になってやっと帰国が実現すると、蘇武は典属国（降伏した周辺異民族を掌る）を拝命したという〔『漢書』李広蘇建伝、蘇武の条、pp.2459-2468〕。『漢書』[p.2467]には「蘇武使匈奴二十年不降、還乃為典属国」と見える。無慮山農がこの故事を印に用いていたことから、彼のコレクションが匈奴（＝非漢人）を意識したものであったことが分かり、このことは「無慮山莊旧蔵拓本」が非漢人による碑刻の拓本コレクションであることと一致している。後半の「三部蔵山」は、おそらく司馬遷が完成した『史記』の正本を名山に隠して亡失に備えたとする『史記』太史公自序^[5]がその出典だとみられる。なぜ「三部」としたのかは

不明であるが、貴重な史料を遺したいとするコレクターの意図がうかがわれる。

No. 6「三多所拓」は、無慮山農の印ではない。三多(サンドー: 1876-1941 年生没)は、蒙古正白旗の出身で、清朝最後の庫倫(クーロン: 現在のウランバートル) 辦事大臣を務めた人物である。1911 年 10 月に起こった武昌蜂起をきっかけに辛亥革命が進行すると、モンゴルでも独立運動が起こったが、この時、庫倫辦事大臣であった三多は退去させられ、ロシアの保護を受けてシベリア経由で天津に帰着した^[6]。その後の民国期には盛京副都統、東北辺防司令官諮議となり、満洲国でも官吏となっている[橋川 1940: p. 16]。No. 6「三多所拓」の朱印があるのは、第 17 冊「和林残碑」であるが、これは松川・松井[2013: pp. 177-180]の拓本写真から第 8 冊「嶺北省右丞郎中総管収糧記」の碑陰であることが分かる。松川・松井[2013: p. 175 注 1]によれば、この「嶺北省右丞郎中総管収糧記」(碑陽・碑陰)は立命館大学図書館にも所蔵されており、その拓本の題記「和林倉碑 庚戌夏日三多 識」から、三多が庚戌つまり 1910 年の夏に採拓させたものであるとする。No. 6「三多所拓」が押印されていることからすれば、本コレクションの第 8・17 冊もこれと同じ時期に採拓されたと考えられよう。なお、この他に京都大学総合博物館・立命館大学文学部に分蔵される「カラ=バルガスン碑」も三多が採らせた拓本であるとされる[羽田 1957: p. 310, 吉田 2011: pp. 10-11]。森安・吉田・片山[1999: plates 14h-i]に示される京大・立命館での分蔵状況と照らせば、「無慮山莊旧蔵拓本」の第 11・12 冊および第 15 冊 2-4 は同じ部分であるので、これらも三多の拓本であった可能性が高いとみられる。

三多は庫倫赴任中に、当地の碑石の拓本を数多く採取していたことが知られている。徐珂『清稗類鈔』鑑賞類、三六橋訪闕特勤碑[pp.4452-4453]には、以下のようにある。

「蒙古三六橋都護多，杭州駐防也。任庫倫辦事大臣時，有『朔漠訪碑図』，徵人題詠。所訪之碑，実有数十種，非專訪『闕特勤碑』也，『闕特勤』其最著者耳。……六橋則自跋此碑云『……宣統庚戌〔1910〕駐節庫倫，乘閒之暇，搜獲古金石数十種，此碑尤為瓌宝，可読者共四百五字。逾年重拓二百紙，有一二字又為風霜漫漶，於是建亭護之。……』^[7]」

拓本をはじめとする書画・骨董・古籍の収集は古来盛んに行われてきたが、清末民初において書画などの贈答は社交の場を成り立たせる道具として親交にとって大きな意味を持ち、政治的資源として活用されたという[天津地域史研究会 1999: p. 149]。三多が庫倫時代(1910-1911 年末まで)に採択した大量の拓本は、新たに知られるようになった漢字以外の文字を含む特に貴重な拓本として盛んにやり取りされたとみられる。本コレクションの「和林」と付く拓本(第 7-19 冊)は、おそらくもとは三多が採拓したもの的一部で、それが無

慮山農の手に渡って整理されたと考えられよう。また、おそらく三多が採らせた拓本をまとめて収集していることは、無慮山農が清末民初を生きた人物である可能性が高いことをも示していると言えよう。

以上、「無慮山莊旧蔵拓本」の内容について述べてきたが、以下では本コレクションがどういった経緯で所蔵先を変えることになったのか、その背景に迫りたい。

3. 東亜研究所から国立国会図書館へ

東亜研究所^[8]は、昭和12年（1937）7月の盧溝橋事件に始まった日中戦争をきっかけに、企画院管掌の下、全アジアおよび周辺諸地域に関する基礎的総合的な調査機関として、翌昭和13年（1938）9月1日に設置された。設立の目的は、「帝国ノ海外発展ニ資スル為東亜ニ於ケル人文自然ニ関スル科学的調査研究ヲ行フ」こと、即ち国策樹立のための資料提供にある。蔵書は最終的に約15万冊。戦時中その一部は福島県二本松や東京八王子浅川に疎開したが、昭和21年（1946）3月23日、6万冊以上が占領軍に接収され、また、東京にあったソ連関係資料も接収されたという。その他の資料には持ち出されたものもあり、東亜研究所の蔵書印のあるものが大量に神田に流出したとされている〔拓植1979：p.226・国立国会図書館2002〕。

そのような東亜研究所の蔵書であった「無慮山莊旧蔵拓本」がどのように国立国会図書館に入ったのだろうか。その来歴の経緯について国立国会図書館に資料開示請求をしたところ、「図書原簿和漢書96001-99000」が開示された。それによれば「無慮山莊旧蔵拓本」は、昭和24年（1949）6月10日に「政経文庫」より受入したとされる。

昭和24年といえば、国立国会図書館が東亜研究所の漢籍約3万冊を東亜研究所の後継団体の政治経済研究所から購入した年である〔国立国会図書館1963・2002〕。「政経文庫」とはこの政治経済研究所の文庫を指すとみられ、「無慮山莊旧蔵拓本」はこの漢籍コレクションに含まれていたことになる。この漢籍の購入をめぐるのは、衆議院で問題視されていたことが「第六回国会衆議院図書館運営委員会議録第三号（昭和24年12月19日）」〔pp.3-5〕に残っている。東亜研究所の漢籍に関するやり取りの要点をまとめれば以下の通りとなる。

多田勇（委員）：衆議院の委員会で購入は保留となっていた東亜研究所の漢籍を、その後継団体である政治経済研究所から約70万円で購入したそうである。そのため今年の1月から3月までの間に新着書を購入できなかったと聞いた。委員長はその購入について了承していたのか〔p.3〕。

早稲田柳右エ門（委員長）：漢籍購入が保留されていたことを私は聞いていないので、

購入の場合にも何ら相談を受けていない [p. 3]。

多田：委員会との連絡が緊密でない点に問題があるのではないか [p. 3]，図書館側は委員会を無視・軽視している [p. 4]。

金森徳次郎（国立国会図書館館長）：漢籍購入について，議論があったことを了知していなかった。私の方〔図書館〕の持っている漢籍と合わせると，やや完備したものになるので買受けた。それ以外の他意はない。図書館と委員会との間に，何か意思の連絡が切れたことはまことに恐縮。どの辺まで指示を受けるかについて，終始注意している。今年の予算は急に作成したので失敗だった [p. 4]。

圓谷光衛（委員）：70 万円でお買いになったのですか [p. 5]。

金森：70 万円で買いました [p. 5]。

圓谷：その所有主，つまり買入れ先を御答弁願いたい。また，予算の執行について，突然だから仕方がないのか。別に予算要求の方法がある [p. 5]。

金森：相手は，従前の東亜研究所という財団法人政治経済研究所。本の評価は専門家に相談して，70 万円に値切った，半額で，ひどく値切って，安かったから買った。予算要求の技術としては，私の方も大蔵省に対していろいろな折衝をしているが，結果こうなったのだから，ひどく追及されますと，私は素人で困る [p. 5]。

東亜研究所が所蔵した漢籍の購入は，国立国会図書館の予算を大いに圧迫するものであった。なぜ国立国会図書館は無理をしてまで購入したのだろうか。当時の国立国会図書館長の金森徳次郎は，第 1 次吉田内閣の国務相として日本国憲法の制定に多大な貢献をした憲法学者で，昭和 23 年（1948）2 月に国立国会図書館初代館長に就任した人物である〔国立国会図書館 HP〕。この金森徳次郎は，その入所の時期は不詳であるが，東亜研究所では幹部であった。特別第一調査会（1941 年設置）の委員長をつとめ，東亜研究所を統括した調査研究動員本部（1944 年 5 月設置）の理事として中心的役割を果たし，戦後の一時期（1945 年 12 月～1946 年 2 月）には所長に就任し，その後も理事として 1946 年 3 月の研究所の解散，政治経済研究所が後継する流れを作り，政治経済研究所の設立後は監事となった〔拓植 1979：pp. 108・208-224・230-231・240-247，渡辺 2010：pp. 9-11〕。国立国会図書館が政治経済研究所から漢籍を購入したその背景には，館長の金森徳次郎がその政治経済研究所の生みの親の一人であったことがあると言えるだろう^[9]。それだからこそ，国立国会図書館の予算を圧迫するまでの大金で漢籍を購入したことが衆議院の委員会で問題となったのである。おそらくこの漢籍の売却金は，ひっ迫していた政治経済研究所の運営費として使用されたとみられ〔cf：拓植 1979：pp. 235-237〕，公的資金を自身が所属する組織に便宜した形となっ

たと言えよう。ただ、戦後に東亜研究所の所蔵資料が大量に流失したこと〔拓植 1979 : p. 231〕を考えれば、金森による購入によって、本稿で扱っている「無慮山莊旧蔵拓本」など貴重な漢籍史料が保全されたと言え、その意義は大きいと言えよう。

4. 無慮山農とは誰か

北京図書館蔵の「撫遠大將軍王奏檔」（請求番号 NC4662.8/2138）は、国立国会図書館の所蔵拓本以外で唯一知られる無慮山農の旧蔵品である。王鍾翰〔1993 : pp. 38-39〕によれば、これは1720年の清朝によるチベット侵攻の際の清朝軍の総司令官胤禛（康熙帝14番目の子）による満文の奏銷集であり、一木匣、20冊から成り、この奏檔には「無慮山農」と「廿年典属三部蔵」の印が有る。この2つの印はその印文から「無慮山莊旧蔵拓本」に押された印（No. 2・4）と同じだとみられる。また、無慮山農は「無慮山莊旧蔵拓本」では非漢人を意識した収集をしていたが、この奏檔も満文であるので、その収集方針も一致していることになる。王鍾翰〔1993 : pp. 39〕は、印に「廿年典属」とあることから「無慮山農は、20年と長く理藩院典属司の任務にあたり、郎中であつたとすべきだが、その姓名の考察はない」とする。つまり、無慮山農が誰であつたのかは、未だに明らかにされていないのである。

この無慮山農は、清末から民国初期にかけて生きた李葆恂（1859-1915年8月7日生没）であると考えられる。それは、葉眉『皇清書人別号録』〔p. 622〕に「無慮山民 李葆恂 李孺墳諱^[10]」と見えるからである。李葆恂は、字は文石、奉天義州の人であり、号には叔默・戒庵・猛庵・孤笑老人・紅螺山人・熙怡叟（50歳以後）がある。また辛亥革命後は避難して天津に住み、名を理、字を寒石、号を鳧翁としたとされ、当地にて享年57で病没したという〔橋川 1940 : p. 168, 『皇清書史』 pp. 234-235〕。また、李葆恂については、陳三立による墓表文も残されている〔『散原精舍文集』巻11, 義州李君墓表, pp. 965-967〕。李葆恂は、金石書画の鑑定で知られ、蒐集家たちは争ってその鑑別を求めたとされるが、陳衍『石遺室詩話』巻6〔p. 7〕には、次のようにある。

李葆恂字文石，号猛菴，義州子和督部〔鶴年〕少子。幼隨宦入閩，問字於故人睫雲敏給事之門。家富収蔵，金石書画，所見既広，鑑別至精審，与宜都楊惺吾（守敬）屹為海内南北兩大家。端陶齋有所得，非請二人鑑定，不自信也。

李葆恂が金石書画の収集家としても名高い端方（号は陶齋）の目利きとして、数々の作品を鑑定していたことが分かる。つまり、李葆恂は当時の第一級の鑑識眼を持つ人物であつた

ことになり、「無慮山莊旧蔵拓本」のコレクターであっても申し分のない人物である。

「無慮山民」が李葆恂の号であるとした葉眉『皇清書人別号録』は、李放の『皇清書史』巻末に附属する1編であるが、この李放(1884-1926年生没)は、李葆恂の息子[橋川 1940: p. 155, 管仲楽 2016: p. 12]であり、葉眉は李放の妻(あるいは側妻)だとみられる^[11]。また、葉眉『皇清書人別号録』に見る李葆恂の記事にはすべてに「李孺墳諱」と記されるが[注 10 参照]、これは李放『皇清書史』巻 23 [p. 228] の李鶴年(葆恂の父)の欄にも見える。李孺(1862-?年生没^[12])は、李葆恂と同時期に張之洞の幕下にいた人物で、李葆恂とはおそらく辛亥革命以前からの旧知の仲であった。李放の日記『清楽堂日記』辛酉(1921年)5月25・28日などにも頻繁にその名が見え、李葆恂の一族とかなり親密な交際があったとみられる。李放『皇清書史』や葉眉『皇清書人別号録』の李鶴年や葆恂についての記載は、李放・葉眉が親族について記すことを憚ったためか、不十分なものであったので、そこを旧知の李孺が補填したと推測されよう。つまり、「無慮山民」が李葆恂の号であるとした『皇清書人別号録』の記事の信憑性は高いと言えよう。

上述したように「無慮山莊旧蔵拓本」には、第 17 冊に「三多所拓」の印が見られ、三多が採らせたと思われる拓本がまとめて収集されていることから、コレクターの無慮山農は三多と同じ清末民初を生きた人物である可能性が高いと推測できた。現在のところ、三多と李葆恂との直接の接点は残念ながら見つけられなかったが、彼らは同時代に生きているので、生没年代から見ても李葆恂が無慮山農であることに問題はない。

また、前に述べたように、無慮山農は、現在の遼寧省錦州市に位置する医巫閭山と記されるその山名を号としていることから、この医巫閭(無慮)山の山莊で収集したか、あるいは少なくとも医巫閭山に何らかの関係を持つ人物であるとみられる。この点についても、李葆恂の貫籍である義州は医巫閭山の西麓に位置するので、彼が「無慮山」を冠する号を持っていたことは全く不思議なことではない。

さらに、清朝末期の篆刻家・書家である黄士陵(1849-1908年生没)の作った「無慮山民」の印(図 2)も李葆恂が「無慮山」を冠する号を持っていたことの信憑性を高めるものである。この印は黄士陵の 54・55 歳(1902+1 年)の作品とされるが[黄裳銘 2001: p. 894]、黄士陵は、1902 年の秋から端方の招きで武昌に滞在し、1904 年には故郷に戻ったとされる[馬国権 1992: pp. 116-117]。つまり、この「無慮山民」の印は黄士陵が端方の下で作成したことになるが、この同じ時期に李葆恂も端方の幕下にいたので[『散原精舍文集』巻 11,



図 2 黄士陵作「無慮山民」印

[黄裳銘 2001: p. 894]

義州李君墓表, pp. 965], この「無慮山民」の印は李葆恂のためのものであったと考えられ、ますます李葆恂が「無慮山」とつく号を持っていたことは確実であると言えよう。

なお、「無慮山農」と「無慮山民」とは最後の一文字が異なるが、李葆恂の号の一つである「熙怡老」が時には「熙怡叟」と示されるように〔橋川 1940 : p. 168, 『皇清書史』付『皇清書人別号録』 p. 613〕, 号の末尾が同様の意味を持つ漢字で書き換えられることはしばしば見られるので問題はない。以上から、無慮山農は李葆恂であると言えよう^[13]。

5. 無慮山荘と東亜研究所のあいだ

東亜研究所資料課による『新着図書目録』No. 15 [p. 126] によれば、「無慮山荘旧蔵拓本」が、東亜研究所の所蔵となったのは、昭和 18 年（1943）1 月 1 日から 3 月 31 日までのこととされる。

東亜研究所では、いくつもの部や班に分かれて各地（ソ連・支那・南方・西南アジア）の調査や資料収集が行われた〔拓植 1979〕。「無慮山荘旧蔵拓本」のようなコレクションを収集するのは、第三部第一班（支那政治班）によるとみられるが、その中でも本コレクションと関係がありそうな研究課題は「異民族の支那統治事例」である。この研究は、昭和 13-16 年（1938-1941）に東京の東方文化学院と京都の東方文化研究所に委嘱されたもので^[14], その成果として『異民族の支那統治概説』（東亜研究所第三部支那政治班編, 1943 年）や『異民族の支那統治史』（東亜研究所編, 1944 年）が刊行されている^[15]。ただし、1941 年以降、東方文化研究所からの長期派遣が中止されたように^[16], 戦時体制下ということで所員が中国に赴くことは困難になったはずなので、「無慮山荘旧蔵拓本」は東亜研究所の委嘱研究に従事した研究者が現地で調達したものではなかったと推測されよう。「無慮山荘旧蔵拓本」が、誰によってどのような経緯で日本の東亜研究所にもたらされたのかは、残念ながら現在のところ不明である。

李葆恂は 1915 年 8 月 7 日に死去し、息子の李放も 1926 年に早逝し、彼らのコレクションの多くは葆恂の孫の李大猷に受け継がれたとされる〔管仲楽 2016 : pp. 12-14〕。その一つとみられる北京故宫博物院所蔵「明拓東陽本定武蘭亭序」には、葆恂・放・大猷の三代が所蔵したことを示す印（「葆恂」・「文石」・「文石審定」・「旧学庵生」, 「李放嗣守」・「義州李放鑑藏」, 「義州李氏大猷石孫嗣藏」など）が押されている〔故宫博物院 HP〕。ただし、「無慮山荘旧蔵拓本」には、李放や李大猷の所蔵印は見られず、代々引き継がれた様子は見られない。李葆恂の死後すぐに売却・譲渡された可能性もあろうが、現在その詳細は不明である。ただ一つ鍵となりそうなのは、李葆恂は（おそらく放も共に）、辛亥革命後（1913 年 4 月）に天津に移り住み〔『津歩聯吟集』呉重熹「序」〕, そこで最期を迎えているので、この無慮山荘

のコレクションは天津にあったと推測されることである。天津は、首都北京に近く、渤海に面して海外とも通じることのできる華北の重要港湾都市である。1860年以降、イギリス・アメリカ・フランス・ドイツが相次いで租界を開き、1898年には日本もそれに続き、国際的な都市となっていた。辛亥革命後の天津では、中国官憲の力が及ばない租界で一線を退いた政治家・軍人・資産家など、いわゆる「寓公」が多く隠棲生活を送ったようで、寓公たちは文化活動を通して、租界の外国人や領事団らとともにひとつの社交場を形成していたとされる〔天津地域史研究会 1999：pp. 121-123〕。天津移住後の李葆恂については、移住時にはすでに病を患っていたとみられること〔『散原精舍文集』巻 11, 「義州李君墓表」p. 966〕, そして呉重熹(1838-1918 年生没)と

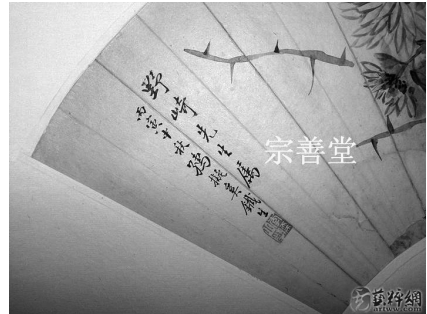
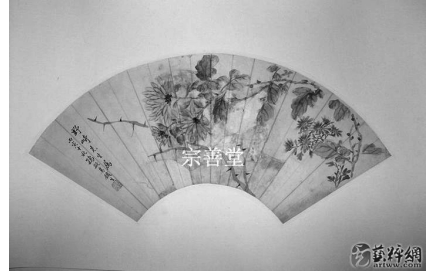


図 3 李孺が野崎誠近へ贈った花卉扇面
(出典は注 19 参照)

『津歩聯吟集』(序文は 1915 年)を作成したこと, また『清史稿』の編纂のために 1914 年に設置された清史館の協修に就任したこと〔鄒愛蓮・韓永福・盧経 2007：p. 86〕が分かり, おそらく寓公の一人として租界^[17]で晩年を送ったとみられる。現時点で、李葆恂と東亜研究所との直接的なつながりを見出すことはできなかったが、以下では「無慮山莊旧蔵拓本」が日本に渡ったその背景として考えうる一つの可能性をあげたい。

ここで着目したいのが、李葆恂の号に「無慮山民」があることを指摘した李孺である。先述したように、李孺の名は、李放の『清樂堂日記』(1921 年 5 月 25 日など)に頻繁に見えるので、李孺も当時(辛亥革命後に移住か?)寓公として天津に居住していたとみられるが、彼は清末の光緒 30-33 年(1904-1907)に、湖広総督であった張之洞の命を受けて日本遊学生監督として、日本に滞在した経歴を持っていた。李孺が移住先の天津で日本人や日本への留学経験者と交流があったことは想像に難くない^[18]。その中でも筆者が注目したのは、李孺と野崎誠近という人物とに交流があったことで、その交流は李孺が野崎に贈った「野崎先生属 丙寅中秋孺擬矣鐵生」と墨書がある花卉扇面(図 3^[19])から窺い知ることができる〔鄭義祥 2014〕。

野崎誠近(1884-1947^[20]年生没)は、早稲田大学卒業後、明治 38 年(1905)6 月に中国に渡り、天津に滞在して貿易に従事した。この渡航は、姉婿で陸軍軍人であった寺西秀武^[21]が、明治 36 年(1903)袁世凱の招きで軍事教官として日本より派遣されていたことと関係

があるとされる。木山〔2004：p. 159〕は野崎について『河〔華〕北房産取締役』のほか実に沢山の肩書^[22]を持った天津居留民の古い顔役で、北洋政府時代から中国政界に首をつっこみ、段祺瑞以下の『安福系』の政客と縁が深く、同派の王揖唐とは、当時流行の『私設顧問』として特に親密だった。占領時代〔北京・天津の占領は1937-1945年〕には軍特務機関にその現地経験を買われ、〔興亜院華北〕連絡部でも、肩書をもたぬ顧問格で、喜多誠一・根本博のコンビに存分に使われたらしい。かつて天津総領事だった吉田茂とは戦後も中国問題顧問のような形で親しかったという」とする。野崎はこのような貿易業・政治活動の一方で、中国文化の研究も行い『吉祥図案解題—支那風俗の一研究—』（1928年初版、1940年改訂版）を出版している。その本には段祺瑞・鄭孝胥・王揖唐が題字や序文を記しているが、『玉篇の研究』で知られる岡井慎吾も跋文を寄せている。その跋文によれば、野崎は岡井が金沢の中学で教鞭をとっていた時期の生徒で、以来親交があったが、大正8年（1919）に岡井が羅振玉『碑別字』（光緒20年（1894）序）の代理購入を頼んだところ、種々の金石文の著作について報せた上、『碑別字』は絶版で急に手に入らないとって『金石萃編』を買って贈ってくれたという。野崎は中国文化に非常に精通し、また最新の金石学の情報を持ち合わせた人物であったことが分かる。

興亜院は、日中戦争の進展に伴って、昭和13年（1938）12月に対中国政策一元化のために設置された内閣直属の機関であるが、この興亜院と東亜研究所とは関係が深い機関であった。まず、野崎が所属した興亜院華北連絡部^[23]は、1940年以降に東亜研究所（第六調査委員会）と南満州鉄道株式会社（満鉄）調査部とが中心となって行った「中国農村慣行調査」に協力している〔内山2002：p. 176^[24]〕。また、1940年10月にはこの興亜院を中心として満鉄・東亜研究所など中国関係の調査機関を組織した「支那調査関係機関連合会」が発足し、相互連絡のシステム化が図られたとされる〔金丸2002：pp. 136-137〕。さらに、東亜研究所が研究を委嘱した東京の東方文化学院と京都の東方文化研究所は、1941年5月に外務省から興亜院に移管されている〔京都大学人文科学研究所1979：p. 59〕。興亜院と東亜研究所とは連動していたとも言えよう。1942年11月に興亜院は対満事務局・外務省東亜局などと統合され、新たに大東亜省となり消滅したが、「無慮山莊旧蔵拓本」が東亜研究所に入ったのはその直後のことなので、それは興亜院（華北連絡部）との関係によると見ても無理はないと思われる。いずれにせよ、「無慮山莊旧蔵拓本」が東亜研究所の所蔵となったその背景としては、無慮山農 李葆恂が晩年を過ごした天津が清末以降には寓公や外交官が行き交い、日中戦争中には日本軍の重要拠点となったように、様々な政治的思惑が交錯した都市だったことがあると言え、そしてその天津には、野崎誠近のように中国文化に精通し中国人とも深く交流しながら日本の特務にあたる人物がいたのである^[25]。

むすびにかえて

本稿によって明らかとなったことをまとめれば、以下のとおりとなろう。

- (1) 国立国会図書館に所蔵される「無慮山莊旧蔵拓本」は、漢字のほか非漢人による多種の文字の碑刻の拓本を含む大変貴重なもので、世界有数のコレクションであると言える。
- (2) 「無慮山莊旧蔵拓本」は、昭和 18 年(1943) 1-3 月に東亜研究所に入り、昭和 24 年(1949) 6 月に国立国会図書館の所蔵となった。
- (3) 「無慮山莊旧蔵拓本」を収集した無慮山農は、李葆恂(1859-1915 年生没)である。
- (4) 「無慮山莊旧蔵拓本」が日本の東亜研究所の所蔵となった背景として、無慮山農 李葆恂が晩年を過ごした天津は、清末民初以降には寓公や外交官が行き交い、そして日中戦争中には日本軍の重要拠点となったように、様々な政治的思惑が交錯した都市だったことがあると言える。

以上本稿で明らかになったことを通して、今後、国立国会図書館所蔵の「無慮山莊旧蔵拓本」が大いに研究に役立てられれば幸いである。なお、本稿は筆者がこれまで専門としてきた分野と異なるため、見落とした重要史料があることが危惧される。また不適切な表現が見られるかとも思われる。この点について、ご寛恕いただきぜひともご叱正を賜りたい。

注

- [1] 国立国会図書館に「無慮山莊旧蔵拓本」が所蔵されていることは、2015 年 11 月 7 日に片山章雄氏(東海大学教授)が突厥碑文研究会で初めて報告し、その後、石見清裕氏(早稲田大学教授)が実見調査して、もとは東亜研究所の所蔵であったこと、突厥文字の碑文はカラ=バルガスン碑であったことなどを確認した。本稿は、それらの報告を引き継いだ調査結果であり、突厥碑文研究会に参加する諸先生方のご協力を得て執筆したものである。また、各拓本がどの碑文に当たったのかについては鈴木宏節氏(青山女子短期大学助教)にご助言いただき、青木俊介氏(学習院大学 PD 共同研究員)には関連資料収集にご協力いただいた。ここに諸先生方への感謝の意を記したい。

なお、本文中の〔 〕は著者が補填した箇所を示す。また、字体は基本的に常用漢字とした。

- [2] 帙の大きさは 3 帙ともに縦 51 cm、横 35 cm。厚さは第 1 帙が 5 cm、第 2 帙が 2.5 cm、第 3 帙が 6.5 cm である。
- [3] 第 18 冊の人物像の拓本は、カラコルムではなくザブハン県のムングト・ヒサー遺跡にある碑のものであり、「和林」とされるのは誤りである。東亜研究所『新着図書目録』No. 15 [p. 126]と国立国会図書館「図書原簿和漢書 96001-99000」の時点で第 18 冊に「和林」は付いていないので、国立国会図書館での整理の過程で、誤って挿入されたとみられる。
- [4] 『漢書』卷 28 下、地理志、遼東郡 [p. 1626] の「無慮〔県〕」の注に「応劭曰『慮音閭』。師古曰『即所謂医巫閭』」とあり、また、『後漢書』安帝紀、元初二年八月 [p. 223] に「無慮県」に注して「属遼東郡。慮音閭。有医無閭山，因以為名焉」とする。
- [5] 『史記』卷 130、太史公自序 [p. 3999]「凡百三十篇，五十二万六千五百字，為太史公書。序略，

- 以拾遺補蕝，成一家之言，厥協六經異伝，整齐百家雜語，藏之名山，副在京師，俟後世聖人君子」。
- [6] 「清国革命動乱ノ際蒙古独立宣言並ニ清国政府ニ対シ行政ニ関スル要求一件4（明治45年）1月10日から2月9日」（外務省外交史料館所蔵，戦前期外務省記録，JACAR: B03050661900）
- [7] 「闕特勤（キョル＝テギン）碑」の漢文面の左下には小さな漢字で「宣統三年庫倫使者三多觀并建亭護之」と刻まれている。この銘から三多が宣統3年（1911）にこの碑のために亭を建てたことが分かり，この銘の有無は採拓年代を知る手がかりとなる〔片山1984：p.12註28・39，大澤・鈴木・ムントルガ2009：pp.82-83〕。ただし，「無慮山莊旧蔵拓本」中には「闕特勤碑」が含まれていないので，ここから採拓年代を知ることはできない。
- [8] 東亜研究所やその所蔵資料については，拓植〔1979〕・渡辺〔2010〕・国立国会図書館〔2002〕に詳しい。
- [9] 拓植〔1979：pp.233-234〕によれば，戦後，解散した東亜研究所の所員の相当数が，金森が初代館長に就任した国立国会図書館に移ったとしている。金森によって，国立国会図書館は，東亜研究所の漢籍だけでなく所員も引き受けたことになる。
- [10] 葉眉『皇清書人別号録』には「無慮山民」の他に李葆恂の号として以下が見られる。「熙怡老 李保閑〔恂〕 李孺填諱」〔p.613〕・「紅螺布衣〔山人？〕 李保恂 李孺題〔填〕諱」〔p.621〕・「孤笑老人 李葆恂 李孺填諱」〔p.624〕。
- [11] 李放『義州李氏葉眉手鈔書稿』の版心の下部では葉眉を「侍兄」とする。また李放『清樂堂日記』〔辛酉（1921年）6月11日：p.767〕に「是日為小姫葉眉生辰，即西兒〔李放の子（大獅か？）〕之生母也。」とある。
- [12] 李孺については，『印林清話』李龠庵〔pp.64-65〕に「李龠庵名孺。漢軍籍。原名宝巽。字子申。仕至湖北提学使。辛亥後易今名曰李孺。」とある。また鄭義祥〔2014〕にも詳しい。
- [13] No.4「廿年典属三部蔵山」の「廿年」という期間は，蘇武が匈奴に囚われの身であった期間でもあるが，李葆恂が清朝に仕えていた約20年間の意も込められているか。李葆恂が贈った詩には，陳三立に「思君廿載勞」，陳衍に「知汝高名廿載強」という語句が見える〔『石遺室詩話』巻6，p.8〕。
- [14] 委嘱研究のタイトルと期間は，東亜研究所第三部支那政治班〔1943：例言p.1〕に従った。なお，京都大学人文科学研究所〔1979：p.53〕には「支那に於いて遼，金，元，清の各王朝が漢民族その他の異民族統治に関して採れる政策」という題目で1939年4月-1941年3月に行われたことが記されており，おそらく同じものを指すとみられる。
- [15] 「無慮山莊旧蔵拓本」が東亜研究所に入った同じ昭和18年（1943）は，小野川秀美による「突厥碑文訳註」〔小野川1943〕が刊行された年で，日本でも非漢人の碑文に関心が高まっていたことがうかがわれる。
- [16] 東方文化研究所からの長期派遣は，外務省文化事業部が費用を負担し，1938年より毎年数名中国に派遣してきた「在支特別研究員」が1941年以降中止となり，「支那派遣軍委託」のみになったとされる〔京都大学人文科学研究所1979：pp.35・59〕。
- [17] 李放『清樂堂日記』辛酉（1921年）6月1日〔p.763〕に「日人近加捐地租」とあるので李放は日本租界に住んでいたとみられ，李葆恂もそうであった可能性がある。
- [18] 李孺（原名は宝巽）は，魯迅（周樹人）が仙台医学専門学校（後の東北大）を退学した際に留学監督を務めており，東北大学史料館には李孺直筆の魯迅の退学通知が残されている〔東北大学史料館魯迅記念展示室HP〕。また，張之洞が李孺に宛てた手紙の内容などは胡穎〔2017〕に詳しい。李孺の着任や帰着などについては，日本の公文書，「在本邦清国留学生関係雑纂／学生監督並視察員之部」（外務省外交史料館所蔵，戦前期外務省記録，JACAR:B12081624700）や防衛省

- 防衛研究所蔵, 陸軍省大日記, 壺大日記, 明治 38-39 年 (JACAR:C04014028800・C04014138900・C04014156200) にも記録されている。
- [19] かつて芸術網 HP (中国の芸術品の交易・交流サイト) にて「【蔵品番号:187570】清代画家 李孺 花卉扇面」として売られていたようであるが, 現在そのサイトは閉鎖され確認できない (図 3 の画像の最終確認は, 百度の画像検索にて 2017 年 8 月 9 日)。
- [20] 野崎誠近の死亡年月日は不明とされてきたが, 外山 [1967a: p.299 欄外注] に 1947 年とあり, また, 洋画家の中村研一の日記 [「中村研一日記」昭和 22 年 11 月 15 日: p. 53] に, 「夜野崎誠近氏の死去を報ず電」とあるので, ここではそれを採用した。中村研一は昭和 13 年 (1938) に華中・華南に, 15 年 (1940) には華北と中国東北部を旅行しており [「中村研一日記」pp. 739・740], この際に野崎と面識があったか。
- [21] 寺西秀武は, 楊守敬が日本で収集した蔵書の保全に努めたことでも知られる [宮崎 2009: p. 417 註 8, 杉山 2006, 横田 2006]。
- [22] 野崎誠近の経歴・肩書は中西 [1942: pp. 904-905], 宮崎 [2009] に詳しい。
- [23] 興亜院華北連絡部については, 柴田 [2002: pp. 35-37] 参照。
- [24] 筑波大学附属図書館には, 「旧東亜研究所第六調査委員会収集文書」として中国農村慣行調査を行った第六調査委員会が収集した 900 件を超える資料が収められている (本情報は, 渡辺新氏 (政治経済研究所事務局長) にご教授いただいたものである。ここに感謝の意を記したい)。これが第六調査委員会の収集した全ての資料かは不明であるが, この資料には拓本の類が含まれておらず, また慣行調査を行った地域とも関係がないので, 「無慮山莊旧蔵拓本」は第六調査委員会の収集資料ではないと考えられる。
- [25] 東方文化研究所に所属した羽田亨と外山軍治 (1939-1944 年は東亜研究所委託事業嘱託として所属) は, 戦後に野崎誠近と親交があった。外山 [1967b: pp. 1-2] によれば, 外山が野崎を知ったのは, 昭和 19 年 (1944) の夏で, 野崎が天津から引き揚げ京都市左京区北白川上池田町に居を構えて間もないころ, 町内会長の宅で出会ったのが初対面であったとする。野崎は, 自分は東洋史が好きなので, 京都帝大と東方文化研究所とでいろいろ教えることができるだろうと考えて京都に住むことにした, と言ったとされる。また, 日比野 [1990: p. 228] には, 羽田亨が東方学会を創立し, 開国百年記念文化事業にも尽力したその端緒となったのは, 野崎が天津時代に特に親密であった吉田茂を羽田に引き合わせたことであったとする。

参考史料

正史 = 中華書局, 標点本

「第六回国会衆議院 図書館運営委員会議録第三号 (昭和 24 年 12 月 19 日)」= <http://kokkai.ndl.go.jp/SENTAKU/syugin/006/0812/00611190812003.pdf>

『印林清話』= 娛堪老人『印林清話』嚴一萍 (編)『美術叢書』5 集第 2 輯, 芸文印書館: 台北, 1975 年

『皇清書史』= 李放『皇清書史』金毓黻 (編)『遼海叢書』第 5 集 (複製版:『清代芸林伝記彙編』13・14, 中文出版社: 京都, 1992 年)

『義州李氏葉眉手鈔書稿』= 李放「義州李氏葉眉手鈔書稿」天津図書館 (編)『天津図書館珍藏清人別集善本叢刊』8, 天津古籍出版社: 天津, 2009 年, pp. 411-832

『散原精舍文集』= 陳三立『散原精舍文集』中国近代文学叢書, 上海古籍出版社: 上海, 2003 年

『清樂堂日記』= 李放「義州李氏葉眉手鈔書稿 清樂堂日記」天津図書館 (編)『天津図書館珍藏清人別集善本叢刊』8, 天津古籍出版社: 天津, 2009 年, pp. 755-831

『津歩聯吟集』= 李葆恂・吳重熹「津歩聯吟集」『義州李氏叢刻』1916 年

『石遺室詩話』巻6＝陳衍「石遺室詩話」巻6『庸言』第1巻第16号, 1913年
「中村研一日記」＝中村研一「中村研一日記」『宗像市史 史料編 別巻』宗像市：宗像, 1995年

参考文献

[日文]

- 内山雅生 2002「華北連絡部の資源調査と華北農村」本庄比佐子・内山雅生・久保亨（編）『興亜院と戦時中国調査』岩波書店：東京, pp. 176-179
- 江上波夫 1951『ユウラシア北方文化の研究』山川出版社：東京
- 大澤孝・鈴木宏節・R. ムンフトルガ 2009『ビチェース II—モンゴル国現存遺跡・突厥碑文調査報告—』Sofex：ウランバートル
- 長田夏樹 2006「西夏語資料略解—涼州感通塔碑の発見と造塔縁起」『東洋学術研究』通巻 157 号（45 巻 2 号）, pp. 180-205
- 小野川秀美 1943「突厥碑文訳註」『満蒙史論叢』4, 座右宝刊行会：東京, pp. 249-425
- 金丸裕一 2002「中国工業調査」本庄比佐子・内山雅生・久保亨（編）『興亜院と戦時中国調査』岩波書店：東京, pp. 176-177
- 片山章雄 1984「突厥闕特勤碑文漢文面の刻文月について」『紀尾井史学』4, pp. 1-15
- 木山英雄 2004『周作人「対日協力」の顛末』岩波書店：東京
- 京都大学人文科学研究所 1979『人文科学研究所 50 年』京都大学人文科学研究所：京都
- 胡穎 2017「博士学位論文 清末の中国人日本留学生に関する研究—主に留学経費の視点から—」『神奈川大学大学院 言語と文化論集』特別号, pp. 1-179
- 国立国会図書館 1963「当館所蔵特殊コレクション紹介（16）東研本と支那文庫本」『国立国会図書館月報』25, p. 27
- 2002「299 東亜研究所」『人と蔵書と蔵書印—国立国会図書館所蔵本から—』雄松堂出版：東京, p. 303
- 柴田善雅 2002「中国占領地行政機構としての興亜院」本庄比佐子・内山雅生・久保亨（編）『興亜院と戦時中国調査』岩波書店：東京, pp. 22-45
- 杉山邦彦 2006「楊守敬『与寺西秀武書』の积文と寺西秀武の略伝」『書論』35, pp. 90-94
- 拓植秀臣 1979『東亜研究所と私—戦中知識人の証言』勁草書房：東京
- 天津地域史研究会 1999『天津史—再生する都市のトポロジー』東方書店：東京
- 東亜研究所（編）1944『異民族の支那統治史』大日本雄弁会講談社：東京
- 東亜研究所資料課 1943『新着図書目録』No.15, 東亜研究所：東京
- 東亜研究所第三部支那政治班（編）1943『異民族の支那統治概説』東亜研究所：東京
- 外山軍治 1967a『東洋の歴史』第5巻, 人物往来社：東京
- 1967b「東洋の歴史5月報（鑑真さんをめぐって）」『東洋の歴史』第5巻, 人物往来社：東京
- 中西利八（編）1942『中国紳士録』（昭和十七年 第二版）満蒙資料協会：東京（復刻版：金丸裕一監修・解説, ゆまに書房：東京, 2007年）
- 中村淳 2007「1339年立石の漢文碑文「靺建三靈侯廟記」について—元代カラコルムにおける祠廟祭祀—」『内陸アジア諸言語資料の解説によるモンゴルの都市発展と交通に関する総合研究』（平成 17-19 年度科学研究費補助金基盤研究（B）ニューズレター 01）（再録：「靺建三靈侯廟記」松田・オチル 2013：pp. 131-142）
- 西田龍雄 1964「西夏文涼州感応塔碑文解説」『西夏語の研究—西夏語の再構成と西夏文字の解説』1, 座右宝刊行会：東京, pp. 155-176, PLATE6-7
- 野崎誠近 1928『吉祥図案解題—支那風俗の一研究』中国土産公司：天津（再版：平凡社：東京,

- 1940 年。再販本復刻：宮崎法子監修・解説，ゆまに書房：東京，2009 年)
- 馬国権 1992「黄牧甫の生涯と芸術 上」北川博邦（編）『黄牧甫自存印譜 上』東京堂出版：東京，pp. 109-125
- 橋川時雄 1940『中国文化界人物總鑑』満洲行政学会：新京（復刻版：名著普及会：東京，1982 年）
- 羽田亨 1957「唐代回鶻史の研究」『羽田博士史学論文集』上巻歴史篇，東洋史研究会：京都，pp. 157-324
- 日比野丈夫 1990「(羽田明博士追悼録) 羽田さんを憶う」『東方学』80，pp. 227-228
- 松井太 2007「和寧郡忠愍公廟碑」『内陸アジア諸言語資料の解説によるモンゴルの都市発展と交通に関する総合研究』（平成 17-19 年度科学研究費補助金基盤研究（B）ニューズレター 01）（改稿版：松田・オチル 2013：pp. 33-45）
- 松川節 1997「カラコルム出土 1348 年漢蒙碑文—嶺北省右丞郎中總管收糧記—」『内陸アジア言語の研究』12，pp. 83-98
- 松川節・松井太 1999「嶺北省右丞郎中總管収粮記」森安孝夫・オチル（編）『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告書』中央ユーラシア学研究会：大阪（改訂版：松田・オチル 2013：pp. 175-193）
- 松田孝一・オチル（編）2013『モンゴル国現存モンゴル帝国・元朝碑文の研究 ビジュアル・プロジェクト成果報告書』大阪国際大学ビジネス学部松田孝一研究室：大阪
- 宮崎法子 2009「解説」野崎誠近『吉祥図案解題—支那風俗の一研究』宮崎法子監修・解説，ゆまに書房：東京
- 村岡倫 2013「和林兵馬劉公去思碑」松田・オチル 2013：pp. 47-60
- 2015「『和林兵馬劉公去思碑』より—元代カラコルム行政の一端—」『九州大学東洋史論集』43，pp. 1-21
- 村田治郎・藤枝晃 1955・1958『居庸関』上・下，京都大学工学部：京都
- 森安孝夫・吉田豊・片山章雄 1999「カラ＝バルガスン碑文」森安孝夫・オチル（編）『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告書』中央ユーラシア学研究会：大阪，pp. 209-224・plates 14h-i
- 横田恭三 2006「辛亥革命期における楊守敬の蔵書保護と水野疎梅—年譜・遺稿・書簡を中心として」『書論』35，pp. 73-89
- 吉池孝一 2007「女真進士題名碑の拓本について」『KOTONOHA』53，pp. 16-18
- 吉田豊 2011「ソグド人と古代のチュルク族との関係に関する三つの覚え書き」『京都大学文学部研究紀要』50，pp. 1-41
- 渡辺新 2010「東亜研究所小史」『政経研究時報』13（特別号）pp. 1-12
- [中文・欧文]
- 管仲樂 2016『義州李氏四世著述綜考』東北師範大学碩士學位論文，東北師範大学學位評定委員會：長春
- 黄嘗銘（編著）2001『篆刻年歴—1051-1911—』真微書屋出版社：台北
- 金光平・金啓琮 1980-a「『女真進士題名碑』訳釈」『女真語言文字研究』文物出版社：北京，pp. 281-320
- 1980-b「『海龍女真国書摩崖』訳釈」『女真語言文字研究』文物出版社：北京，pp. 326-331
- 李文田 1897『和林金石録』（羅振玉校定版：『石刻史料新編』第 2 輯第 15 冊，新文豐出版公司：台北，1979 年）
- 王鍾翰 1993「胤禎与撫遠大將軍王奏檔」『歷史研究』1993-2，pp. 38-48
- 鄭義祥 2014「清代遵化籍画家李孺浅考」→百度文庫 HP
- 鄭愛蓮・韓永福・盧經 2007「『清史稿』纂修始末研究」『清研究』2007-1，pp. 86-94

- Kane, D. 1989-a “Chapter five: Inscriptions in the Jun hen script: (2) The nüzhen Jinshi timing bei.” *The Sino-Jurchen Vocabulary of the Bureau of Interpreters*. Indiana University, Research Institute for Inner Asian Studies: Bloomington, Ind. pp. 46-50.
- 1989-b “Chapter five: Inscriptions in the Jun hen script: (5) The Hailing nüzhen guoshu moya inscription.” *The Sino-Jurchen Vocabulary of the Bureau of Interpreters*. Indiana University, Research Institute for Inner Asian Studies: Bloomington, Ind. pp. 56-59.
- Iwao K., Hill, N. and Takeuchi Ts. 2009 *Old Tibetan Inscriptions* (Old Tibetan Documents Online Monograph Series vol. II). ILCAA: Tokyo.
- Radloff, W. 1892 *Atlas der Alterthümer der Mongolei: Arbeiten der Orchon-Expedition*. 1. Lieferung. Buchdruckerei der Akademie der Wissenschaften: St. Petersburg.

[HP]

愛知県立大学古代文字資料館 HP (愛知県大 HP) : 2017/9/15 最終確認

a : 海龍女真国書摩崖拓本 <http://www.for.aichi-pu.ac.jp/museum/x2kfol/j2p06.html>

b : 女真進士題名碑拓本 1 <http://www.for.aichi-pu.ac.jp/museum/x2kfol/j2p01.html>

c : 女真進士題名碑拓本 2 <http://www.for.aichi-pu.ac.jp/museum/x2kfol/j2p07.html>

d : 女真進士題名碑拓本 3 <http://www.for.aichi-pu.ac.jp/museum/x2kfol/j2p08.html>

芸粹網 HP : <http://www.artww.com/> (2017/8/24 よりサイト停止)

故宮博物院 HP : 2017/9/27 最終確認

<http://www.dpm.org.cn/collection/impres/233473.html?hl> = 明拓東陽本定武蘭亭序

国立国会図書館 HP 近代日本人の肖像 (金森徳次郎) : 2017/9/21 最終確認

<http://www.国立国会図書館.go.jp/portrait/datas/366.html?cat=95>

東北大学史料館魯迅記念展示室 HP : 2017/9/21 最終確認

http://www2.archives.tohoku.ac.jp/luxun/1_6_luxun.html

百度文庫 HP : 2017/9/27 最終確認

<https://wenku.baidu.com/view/3946b30f43323968011c92eb.html>

(ふくしま めぐみ 学習院大学国際研究教育機構客員研究員)

Ex-WuLü ShanZhuang 無慮山莊 Collection of Rubbings in the National Diet Library

Megumi Fukushima

Abstract

The National Diet Library owns Ex-WuLü ShanZhuang 無慮山莊 Collection of Rubbings (Call No.: 222.002-M988) which is comprised of 42 rubbings. Most of the collections are precious rubbings of the monuments which are engraved in characters other than Chinese script such as Old Turkic script, Jurchen script or Tangut script, etc. Their existence had not been known even among researchers. Examination of their backgrounds, by the seals and the writings in India ink that are remained on them, revealed that they were at first collected by WuLü ShanNong 無慮山農 at WuLü ShanZhuang, and then moved to the East Asia Institute 東亜研究所 which was a Japanese research organization, and then, after the war, into the National Diet Library 国立国会図書館. In this report the author disclose that WuLü ShanNong is Li Baoxun 李葆恂 who lived in the early Republic of China through the last years of Qing dynasty from 1859 to 1915 and tries to approach the history and background of their change of locations as much as possible in the historical development of modern China and Japan.